二度目の着地

1944年12月3日午後２時ころ、東和田の山林にアメリカの大型爆撃機B29が墜落。その53年後の1997年９月25日、東庄町ふれあい公園にて日米合同慰霊祭が開催され、墜落した元機長が町を訪れました。

翌1998年に発行された「二度目の着地～平和と友好を願って～」をもとに、その軌跡をたどります。

大型爆撃機B29の墜落

1944年12月3日午前6時。サイパンのマリアナ基地から計80機のB29が飛び立ちました。爆撃目標は中島飛行機武蔵製作所（東京）。町に墜落したB29（愛称ロゼリアロケット）は80機を率いる編隊長機で、この日は作戦司令官が同乗していました。彼らは、高度一万メートルを維持し富士山を目印に北上。富士山が見えると東に針路をとり、中島飛行機武蔵製作所をめがけ爆弾を投下しました。

任務完了後、編隊は東京上空を離れ、サイパンに帰還する予定でしたが、午後2時ごろ、西の上空（佐倉市あたり）で日本の零式戦闘機・飛燕（ひえん）に襲撃されました。機体がコントロールできなくなり、神代村上空で空中分解。搭乗員は、相次いで脱出しました。

搭乗員12人のうち7人が即死、残り5人のうち2人は日本の陸軍病院にて死亡。捕虜収容所に送られ、戦後、アメリカに生還できたのは3人。その一人がロゼリアロケットの機長・ゴールズワージさんでした。

▲防災頭巾をかぶり墜落したB29を見る子どもたち

元機長と日本人女性の出会い

太平洋戦争当時、ゴールズワージさんはアメリカ陸軍航空隊の少佐でした。12月3日に、サイパンから計80機を率いて爆撃後、墜落。神代村の菅谷賢司さん（神田）らに捕らえられ、東京の憲兵隊本部で壮絶な取り調べを受けました。3月には東京大空襲を体験し、その後、大森捕虜収容所へ移されました。

終戦後は、アメリカへ帰国し、父の農場を経営。晩年は、仕事をすべて子どもへ任せ、国内外を旅する生活をしていました。

そういった中、1993年にハワイ・マウイ島の教会で、横浜市の長澤のりさんと出会います。宿泊先が一緒で、ゴールズワージ夫妻から声をかけたのが始まりでした。

▲ゴールズワージさん夫妻（1940年）

ME TOO　私もだよ

その日のうちに親しくなり、ゴールズワージさんは「東京大空襲を知っていますか」と長澤さんに質問します。当時東京の本郷で空襲を体験した長澤さんは「あの真っ赤な空は死ぬまで忘れません」と答えると、「ME TOO　私もだよ」と話しました。「あなたは空の上にいて、私たちの上に爆弾を落としたのでしょ」と口調を強めると、ゴールズワージさんは静かに、爆撃のこと、墜落のこと、そして捕虜になったときの話をしたのです。

長澤さんは、身の縮むような思いをしながらも、ゴールズワージさんの人柄に触れたことで、交流を深め、毎年、同じ時期にハワイへ行くようになり、親しくなりました。

墜落した場所を知りたい

「自分の飛行機についての情報、自分を撃墜した日本人パイロットの名前や捕らえられた場所を知りたい。襲撃の勇気をたたえたい」。

ゴールズワージさんから相談を受けた長澤さんは、ハワイでの出会いを新聞に投書したことをきっかけに、多くの研究者を知り、真相を突き止めることになります。

Interview

全てが絶妙のタイミングだった

熊谷（くまがい） 明子（あきこ）さん（東京）元足立区郷土博物館 歴史調査員
（旧姓仲村）

長澤さんから依頼を受け、ゴールズワージさん墜落時のことを調べた熊谷さんに、調査や慰霊祭などについて伺いました。

1994年、太平洋戦争末期に首都圏に落ちたB29の墜落地点などを調べていた私は、NHKの番組に出演。番組終了後、長澤さんからゴールズワージさんに関する電話がありました。

ゴールズワージさんの記憶をもとに、当時の記録を調べました。墜落は1944年12月３日、その日地上に落ちたのは千葉県神代村だけです。神代村に落ちたB29搭乗員名簿を捜し出して、その中にゴールズワージさんの名前があれば、墜落地点は神代村だと断定できます。国会図書館の憲政資料室で、多くの記録を調べたのですが、アメリカ軍の記録は膨大な量で、資料の状態もよくありません。

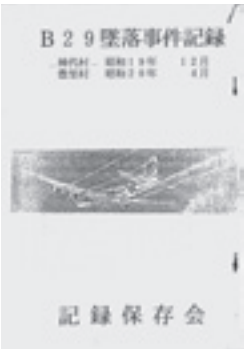
調査中だった1995年に、東庄町で機関銃が発見され、新聞にも大きく取り上げられたことで、同じくB29墜落調査をされていた栃木県の高校教諭・森一博さんから、「東庄町でB29墜落時の目撃談を本にまとめた宮崎さんという方がいる」と連絡がありました。その後、宮崎さんから送られてきた「B29墜落事件記録」にはゴールズワージさんの捕らえられた時の記憶と一致する話が収集されていました。また国会図書館で探索した資料でも確定ができました。

長澤さんと私は東庄町へ向かい、宮崎さんの案内で、墜落現場や搭乗員たちの捕らえられた場所を巡りました。「慰霊祭をやりましょうや、平和な日本で再会しましょう」と、宮崎さんの言葉から慰霊祭は始まりました。

慰霊祭は、宮崎さんが「B29墜落事件記録」を発行したことで種がまかれ、当時の記憶がある方が町に多くいて、輪が広がっていったと思います。ゴールズワージさんも来町を切望していましたし、全ての物事がベストタイミングであったと思います。

▲町でゴールズワージさんについて話す長澤さんと熊谷さん（中央）

B29墜落事件記録



熊谷さんの調査により墜落地が神代村と判明したのが、1995年末。その10カ月前の1995年2月に、東庄町郷土史研究会理事の宮崎雅夫さん（東和田）が「B29墜落事件記録」を発行しました。

宮崎さんは、墜落当時に地元で活躍された方の多くが故人となり、戦後50年のけじめとして記録を後世に残すため「今やっておかねば」と、郷土に起こった事件の寄稿を各方面へ依頼し、集められた記録を文集にまとめました。

その年の8月には、旧神代小学校の跡地に建設中だったふれあい公園で、B29墜落時の機関銃が発見されました（現在は熊谷さんのご尽力により江戸東京博物館にて常設展示）。

迎える会の発足

1996年6月、熊谷さんと長澤さんは、宮崎さんに現場などを案内されます。この時に、宮崎さんはゴールズワージさんを迎えることが出来そうな予感がし、何度も集会を開きました。そして、1997年2月に「日米友好同志会（仮称）」を結成し、同年の9月に元機長夫妻の訪問が決まります。

B29の元機長を捕虜となったとはいえ、招待したら反対する人もいたかもしれない。しかし、50年過ぎて日米の友好をもとに発展し、戦争の悲惨さ、むなしさを忘れず、永遠の平和を願うことを会の目的としました。名称は正式に「B29元機長夫妻を迎える会」とし、メンバーは12人、会長に宮崎さんが選ばれました。

暗中模索で会合を重ね、行政の援助を一切受けないことに決まりました。町ライオンズクラブや東庄ゴルフ倶楽部の応援を得て、協力体制も整いました。